

平成 24 年度 第 5 回長野県観光振興審議会 議事録

1 日 時：平成 24 年 11 月 19 日（月）午前 10 時から 12 時 30 分

2 場 所：長野県庁 特別会議室

3 出席者

[委 員] 井上弘司、今井明美、岡庭一雄、駒谷嘉宏、佐藤博康、塩島和子、
高野和也、高野登、竹村元尋、玉沖仁美、花岡利夫、松本猛、渡邊充子
（敬称略）

[長野県] 観光部長 野池明登、観光企画課長 浅井秋彦、
信州ブランド推進室長 熊谷 晃、観光振興課長 秋山優一、
国際観光推進室長 佐藤公俊、移住・交流課長 小田切昇、
国際課長 白鳥博昭

4 議事録

（浅井観光企画課長）

皆さんおはようございます。ただ今から第 5 回長野県観光振興審議会を始めさせていただきます。

本日は佐藤会長を始め、15 人中 13 名の委員にご出席をいただいております。久保田くに子委員、中川完治委員からは所用のため欠席する旨のご連絡をいただいておりますので、ご報告申し上げます。

本日は概ね 12 時半頃の終了を予定しておりますので、よろしくお願いたします。それでは最初に野池観光部長からご挨拶を申し上げます。

（野池観光部長）

おはようございます。

審議会の開会にあたりまして、一言お礼のご挨拶をさせていただきたいと思えます。本日は数えて 5 回目の審議会でございますが、これまで「ワールド・カフェ」方式という新しい方式を取り入れさせていただいたり、大変お忙しい中を地域懇談会にご出席をいただき地域の皆様から生の声を直接お聞き取りいただいたり、委員の皆様には大変お骨折りをいただき、ありがとうございました。

本日は、最終的な答申（案）についてご意見をいただく大詰めの審議会ということでございます。私ども事務局といたしましては、委員の皆様方のお考えや思いをできるだけこの答申に反映させようということで、佐藤先生ともご相談をさせていただきながら、提出資料をご用意させていただいたところでございます。

答申は今後 5 年間の長野県の観光振興の方向性を体系的にまとめるものになりますので、まだまだ言い尽くせていない、あるいは、こういった方向性を加えた方がいいなど、忌憚のないご意見を是非頂戴できればと思っております。

佐藤先生、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(浅井観光企画課長)

つづきまして、新任の委員をご紹介させていただきます。

当審議会の委員をお努めいただきました近藤清一郎委員が10月17日をもって退任されました。その後任に花岡利夫委員を委嘱申し上げますのでご紹介させていただきます。

花岡委員、一言ご挨拶をお願いします。

(花岡委員)

おはようございます。東御市長の花岡でございます。

近藤前千曲市長の後に市長会の経済部会長をお引き受けした関係で、この審議会にも委員という形で参加させていただくことになりました。

どうぞよろしくお願ひします。

(浅井観光企画課長)

ありがとうございました。

それでは本日の議事に移らせていただきます。議長は会長が務めることになっておりますので、佐藤会長よろしくお願ひいたします。

(佐藤会長)

皆さんおはようございます。本日は朝早くからお集まりいただき、ありがとうございます。

先ほど野池部長からもお話がありましたように、今日は最後の大詰めの審議会となります。是非、本日の審議で素晴らしい答申の最終案をまとめていただきたいと思っております。

お手元にはたくさん資料が配付されてございますが、これらを参照していただきながら、実り多い議論をしていただき、全員の皆さんが納得できる内容にまとまるようご協力をお願いしたいと思います。

それでは、事務局の方から資料についてご説明いただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひします。

(浅井観光企画課長)

それでは資料につきまして説明をさせていただきます。

資料1をお願いいたします、「新たな観光振興基本計画の策定スケジュール(案)」でございます。

本日11月19日が第5回審議会でございます。本日この後の審議の状況にもよりますが、予定ですと12月上旬に知事への答申を予定しております。

それを受けまして、今度は県の方で具体的な施策を盛り込んだ計画づくりを進め

ることとしておまして、本年度末の3月には新しい計画を策定するスケジュールとなっております。

資料2をお願いいたします。「新たな観光振興基本計画の策定について(答申)(案)概要」でございます。

前回まではA3ペーパー1枚で概要をお示ししてきましたが、ボリュームが大きくなりましたので、今回から項目ごとに要点を1ページにまとめる方法に変えさせていただきます。

中身は資料3、本編の方でご説明いたしますので、この資料の説明は省略させていただきますと思います。

資料3をお願いいたします。「新たな観光振興基本計画の策定について(答申)(案)」でございます。

前は「答申(案)たたき台」をお示ししてご審議いただき、色々な意見を頂戴いたしました。アンダーラインの部分は前回の「たたき台」からの修正か所でございます。前回いただいたご意見をできるだけ反映させていただいたところがございます。

また、やさしく分かりやすい表現にすべきというご意見も頂戴いたしましたので、これまでの「である調」の文章や「体言止め」の部分、「ですます調」の文章に改めたほか、分かりにくい部分には少し言葉を加えたり、他の言葉に置き換えたりいたしまして、分かりやすい表現を心がけたところであります。

それでは、修正した部分を中心に内容をご説明させていただきます。

11ページをお願いいたします。10ページまでは文章の末尾を修正したのですが、11ページでは、「第3章 長野県観光の課題」「1 観光振興施策の点から面への転換」の1つ目の○で、「③外国からも訪れてもらう」を削除してあります。この部分は、次のページの「5 海外からの誘客の促進」と記載が重複しておりましたので、11ページの方の記載を削除させていただくということでございます。

それから11ページの1番下に「観光地域づくり」について用語解説を加えました。今回の答申案の中には「観光地域づくり」という言葉がキーワードとして沢山でてきますので、その説明を欄外にお示したところでございます。「観光による交流人口の拡大や地域経済の活性化などを目的として、身近にある自然や景観、伝統や文化などの地域資源を活かしながら、住民参加のもと、地域の幅広い関係者が一体となって進める地域づくり」と定義をさせていただきました。

15ページの1番上の○をお願いいたします。前ページから続く「3 大都市圏から近い地理的優位性」の中で平成26年度末に予定される北陸新幹線の金沢延伸の記述がございましたが、これは3ページ「第1章 観光を取り巻く環境」「4 高速交通網整備による可能性の広がり」にも環境変化として記載があり、重複してございましたので、15ページの方の記載を削除したところでございます。

17ページをお願いいたします。第2編「長野県観光のめざす姿」でございます。表題の下に新たに8行を追加させていただきました。続く第1章でめざす姿をお示

しするわけですが、その前段で、基本的な事項として、視点の転換や何を変えていくのかという趣旨について説明を追加したところでございます。「現在の長野県観光は、第1編 現状と課題でみてきたように、観光地利用者の長期的な減少をはじめとする厳しい現状に直面しており、そこから生じるさまざまな課題はこれまでの発想の延長線上では解決できない状況にあります。これまでの観光振興施策は、キャンペーンを主体としてきましたが、今後は、それに加え、観光地や観光産業の体質改善といった本質的な部分を強化していく必要があります。」ということで、キャンペーンだけでなく、もっと中身を強化していくべきという趣旨を記載したところでございます。それを受けまして、長野県観光のめざす姿はこうあるべきだとお示しさせていただいたという状況です。

同じページの「第1章 長野県観光のめざす姿」につきましては、字句の修正はございますが、中心となる事項は修正しておりません。答申としてはこうした文章でお示ししようと考えております。

この辺りを県民の皆様にもどのように説明していくかということ、参考として概要資料である資料2の6ページをご覧くださいと思います。上に「長野県観光のめざす姿」を記載してございます。その下では「何が変わるのか?」としてございます。つまり、めざす姿の実現に向けて取り組むことで何がどう変わるのかということを具体的に説明するものとして記載させていただいたものでございます。1つ目は、「観光振興の担い手」として、観光関係者だけではなく、幅広い主体の参画を求め、みんなで参加しながら観光振興を進めましょうということでございます。2点目は、「観光地の魅力」として、施設のファンから地域のファンになっていただく、つまりこれまでは特定の観光施設や旅館・ホテルのファンであった方達を、地域、最終的には長野県のファンになっていただくための取組をしていきたいと思います。3点目は、「可能性の拡大」として、観光分野単独での振興から、「観光×〇〇」、観光を起点として、下に農業、工業、スポーツ、文化、健康、環境などを例示してございますが、そういったものと融合しながらメニューづくりをしてチャンスを広げていきたいと思います。最後は「信州ブランド戦略との連携」として、個別ブランド、県内にはよい素材やブランドが個々にはございますが、それらを磨きながら、信州全体のブランドとして価値を創造・発信していきたいと思います。こういった視点で、取り組む内容を変えていきたいと思いますということを一般県民の方達に説明し、一緒にやっていきたいと思います」と広報していきたいと考えているところでございます。

19ページをお願いいたします。「第2章 達成目標」でございます。これにつきましても前回ご議論をいただいたところでございます。2つ目の〇に「主要な達成目標は、観光地利用者数、外国人宿泊者数、観光消費額、顧客満足度を基本として設定することが適当です。」としてありますが、こういった形での答申はいかがかという提案でございます。この4項目につきましては、現行計画と基本的には同じになっております。このうち観光消費額については、これまで県全体のトータルの消費額としておりましたが、例えば1人当たりの消費額という形での設定もあるのではないかとご議論をいただいております。県全体の総額となりますと入込客数の

増減がほぼそのまま反映されるという傾向がありますが、1人当たりの消費額となりますと、人数の多寡ということではなくて、商品・サービスの魅力ですとか、関係者の取組努力がより数値として反映されやすいのではないかと考えておきまして、実際の計画の中での目標設定ではこういったことも踏まえて設定をしていきたいと考えているところでございます。

21 ページをお願いいたします。長野県観光のめざす姿の実現に向けて取り組む施策を体系化して示したものがこのページでございます。まず、「重点的に取り組むプロジェクト」を3つ掲げてございます。これは、行政や観光関連団体、事業者、県民が一体となって取り組む施策となっております。その下に、長野県観光の魅力にさらに磨きをかけていくための「県の観光振興施策」を5つの分野に体系化してお示ししてございます。プロジェクトと県の施策を合わせてめざす姿を実現していこうということでございます。

22 ページをお願いいたします。3つのプロジェクトの関係をお示ししてございます。各プロジェクトにはそれぞれ関連する部分がございますので、下の図にお示したように3つの円を重複させてございます。つまり、それぞれ独立して取り組むのではなく、3つのプロジェクトを相互に連携させながら推進していこうということでございます。

23 ページをお願いいたします。1つ目のプロジェクト「“山岳高原を活かした”世界水準の滞在型観光地の形成」でございます。前回は「世界水準の山岳高原リゾートづくり」というネーミングでご審議をいただき、色々なご意見をいただきました。「リゾート」という言葉に違和感がある、「日本のふるさと」を売ろうとする長野県にとって「リゾート」という言葉はイメージが違うのではないか、というようなご意見をいただき、トータルとしてタイトルを修正した方がいいということございました。それを受けまして今回のようにタイトルを修正いたしました。が、「趣旨」は前回お話ししましたとおり、長野県の優位性、強みを活かし、他県との差別化を進めるという意味で、「山岳高原」を最大限に活かしましょうということです。それから、「世界水準の」というのは、長野県の特性を活かすことが前提なのですが、世界のいいところは取り入れていきたいと思いますということでございます。それから「滞在型観光地」は地域経済への貢献ということで、より長く滞在していただくことをめざすプロジェクトでございます。

「主な取組」として、①から⑥を掲げさせていただきました。1つ目は、山岳高原環境の徹底した保全でございます。2つ目は、景観の保全・育成でございます。3つ目は、山岳高原を活かした滞在プログラムの造成と、それを手軽に購入できる仕組みづくり、そうしたサービスをワンストップで提供する取組でございます。4つ目は、魅力あるスノーリゾートの構築でございます。5つ目は、安全で楽しめる登山の機会の提供でございます。最後の6つ目は、外国人旅行者の戦略的誘致でございます。

24 ページをお願いいたします。2つ目のプロジェクト「県民参加による共創と協働の“観光地域づくり”」でございます。前回は「連携と協働による観光地域づくり」というネーミングでございました。「連携」という言葉を「共創」に変えてございま

す。「共創」の定義は1番下にお示ししてございますが、「連携」よりも新たな価値を創り出すという意味合いのある表現に変更させていただいたところでございます。

「主な取組」として、1つ目は、観光地域づくりの中核となる人材の育成とその推進組織の立ち上げ支援でございます。2つ目は、滞在交流プログラムの企画・造成の支援による新たな観光ニーズへの対応でございます。3つ目は、県民総参加のおもてなしの推進でございます。

25 ページをお願いいたします。3つ目のプロジェクト「“信州ブランド”の磨き上げと国内外への発信」でございます。前回からネーミングは若干変えてありますが、趣旨は同じ内容となっております。

「主な取組」として、1つ目は、県内外に「信州らしさ」を統一感をもって発信していくものでございます。2つ目は、食の魅力向上と土産物などの物産の振興でございます。3つ目は、観光サービスにおけるおもてなし向上の取組でございます。4つ目は、ブランド価値の開発や磨き上げと国内外への発信でございます。

26 ページをお願いいたします。プロジェクトと合わせて、県が取り組む施策を5つの分野に体系化したものでございます。

27 ページをお願いいたします。1つ目の分野「観光地域づくりを担う人材の育成」でございます。「施策の方向性」としましては、中核人材の育成、県民の皆さんの観光に対する意識の醸成や子どもの頃からの地域学習、来訪者をあたたかくお迎えしようとする気運の醸成、地域の連携・協働の取組といったことをやっていく必要があるという内容でございます。

28 ページをお願いいたします。2つ目の分野「強みを活かした信州観光の質の向上」でございます。これは色々な内容を含んでおり、商品の魅力づくり、サービスや発信の方法も含めて質の向上という中身になっております。「施策の方向性」としては、商品の企画・販売までをワンストップで一元的に行う仕組みづくり、ブランドイメージの統一感ある発信や観光資源の価値を創出し発信する仕組みの構築、他分野との連携による商品の造成・販売、そういったことによって質の向上を図っていくという中身でございます。

29 ページをお願いいたします。3つ目の分野「来訪者にやさしいハード・ソフト整備」でございます。「施策の方向性」としては、統一感のある環境整備やそのための基準づくり、情報提供などの来訪者の利便性や快適性の向上、高齢者・子ども・女性の視点を重視した来訪者にやさしい地域づくりといったことをやっていく必要があるという内容でございます。

30 ページをお願いいたします。4つ目の分野「市場のニーズを踏まえた誘客、交流の促進」でございます。前回は「マーケティングに基づく誘客・交流の促進」というネーミングでございましたが、「マーケティング」という言葉が一般の方になじみのない分かりにくい言葉ではないかというご指摘を踏まえ、ネーミングを変えてございます。「施策の方向性」としては、市場の視点を的確に把握したターゲットを絞った情報発信、MICE・スポーツ合宿・学習旅行などの誘致による交流人口の拡大、北陸新幹線金沢延伸などを見据えた広域観光の推進といったことに取り組む必要があるという内容でございます。

31 ページをお願いいたします。5 つ目の分野「ゴールデン・ルートに負けない外国人誘致戦略」でございます。東京、富士山、関西を結ぶゴールデン・ルートに負けないよう外国人旅行者誘致を積極的にしていこうとするものでございます。「施策の方向性」としては、受入体制の充実、対象国ごとの現状を踏まえたきめ細かな施策展開、海外からの教育旅行の受入に取り組んで行く必要があるという内容でございます。

33 ページをお願いいたします。「第4編 エリア別の観光地域ビジョン」でございます。答申ではご覧の3つの○の記載に止めております。これを受けまして10圏域ごとの地域特性を踏まえた将来像、施策の展開を各地域の観光戦略会議等で検討をしていくことになっております。

35 ページをお願いいたします。「第5編 計画の推進のために」でございます。ここは全面的に変えてございますが、「1 計画推進の基本的な考え方」については、前回の審議会で参考資料3「役割分担の基本的な考え方」としてお示ししたものとほぼ同じにしております。この中で前回資料から変更した部分は、36 ページの表の下から2つ目で「大学など」ということで大学についての記載を加えさせていただいたところでございます。

37 ページをお願いいたします。「2 計画の検証と評価」でございます。これも前回お示ししましたものとほぼ同じ内容になっております。

39 ページ以下は附属資料でございまして、諮問書や審議経過、委員の皆さんの名簿などを付けて最終的に答申としてまとめさせていただきたいと考えております。

資料3「答申（案）」につきましても、以上でございます。

資料4「答申文（案）」をお願いいたします。「新たな観光振興基本計画の策定について（答申）」ということで、12月上旬に行う知事への答申の鑑になる部分の案でございます。答申本編で書きつくせなかったこと、県に対する期待などがございましたらここに書いていただくということで、こちらについても後でご審議いただきたいと考えております。

最後、参考資料1と2、「新たな総合5か年計画」の答申の資料でございます。観光振興基本計画の上位計画である県の総合5か年計画について11月8日に県総合計画審議会から知事に答申がなされておりました、その資料をお付けしてございます。観光分野につきましても整合を図る必要がございまして、これからご審議いただく観光振興基本計画の「答申（案）」の内容について調整をさせていただきたいというところでございます。

提出資料の説明は以上でございます。よろしく申し上げます。

（佐藤会長）

ありがとうございました。

予定では本日が最後の審議会となりますが、まず、お手元に配られている資料3、

答申（案）の39ページをお開きください。4月の知事からの諮問を踏まえて、我々審議会は何を議論し、どのような答申をすることを要求されているのかということをもう1度復習しておきたいと思います。諮問に基づいてこれまで議論を進めてきたわけですが、最初はビジョンづくりもしましたし、皆さんに「ワールド・カフェ」方式で率直なご意見やご感想をお話いただきながら、この長野県にとって何が問題であり何が資源であるのかということを集めて、それらを踏まえ、では長野県の観光はどうあるべきなのかという方向性を出してきたものと認識しております。それと39ページの諮問内容とを結び付けて、今現在の答申（案）が出来上がっているというところを再確認しておきたいと思います。

この諮問書にあるように、知事からは、新たな観光振興基本計画の基本的な考え方を示してもらいたいということをお聞かされていました。また、そのために我々の周りの厳しい状況にどのように対応していけばいいのか考えていただきたいとする一方で、長野県には地理的優位性など高いポテンシャルがあることとか、農山村の価値を見直す気運が高まっていることとか、あるいは北陸新幹線の金沢延伸、こういった発展の可能性が十分にあるとこういうことも知事の諮問書にございました。そういったことを踏まえて我々は5つの視点での検討を承っております。1つ目は地域経済の活性化に寄与する観光施策の方向性です。2つ目は強みを伸ばし、弱みを強みに転換することにより長野県観光の魅力を向上させること。3つ目は住む人が誇りや愛着を抱くことができる観光地域づくり。4つ目は本県を訪れる外国人旅行者についての実効性ある取組。5つ目は長野県らしい「おもてなし」や美しい観光地づくりなどを幅広い県民参加で推進していくための仕組みづくり。こういったことを考え、目に見える内容に示してもらいたいということです。

ですから、これらについて、ビジョンづくりから始まり、ご意見をまとめながら事務局に最終の答申（案）をつくっていただいて本日ご提示いただきましたので、これから最後の議論を始めたいと思います。

それから答申文の案も資料4としてお手元に配られていますが、表紙の文書としてはこのような内容で、具体的な答申の中身としては資料3の部分が一緒に知事のお手元にわたるということとなりますので、その内容について委員全員が納得していただきたい、納得できないものについては修正を加えていかなければならないということとなりますので、そういう合意をとりつけていきたいと思います。

まずは資料3の答申（案）第1編、1ページから15ページまで、これは「現状と課題」になりますが、我々の認識に齟齬はないか、あるいは漏れはないか、それから長野県の強みについて我々はこのようなことで合意してよいかということについて、10分ほど時間をとってご意見を承りたいと思います。

この部分は再三にわたって議論させていただきました。合わせて表現についても、事務局のご説明にありましたように、一般の方にも理解しやすい内容にしてくれという前回の審議会でのご提案に基づいて修正を加えていただいた内容かと思っております。

特にございませんか。松本委員いかがですか。

(松本委員)

例えば14ページにある「豊かな自然がもたらす観光資源」ということをどのように認識していくのかということが非常に大事なことだと思います。さっと見せていただいた印象でいうと、我々が重点的にかなり突っ込んで論議した部分が、最終的に平均化されてきているという印象があります。大切なことは、我々はこの審議会の中で、人々が「信州暮らし」を本当に楽しめるようにしなければいけないということを論議したことだと思っております。

それがこの答申(案)の中で十分に強調できているのかどうかということが、15ページまでめくった時に、やや心配に感じたところであります。

つまり、やや一般論になりますが、そこに住む人が本当に幸せだと思える場をどれだけつくるかということであり、例えば「山岳高原」という言葉の中に、それがどのように盛り込まれているだろうか、私達が例えば色々な部分で周辺部分との協働が必要だといっていますが、では農業と観光との関係はどのようなだろうか、そういう問題が、我々が「ここが肝なのだ」と論議してきたものがしっかりアピールできているかどうかということが、今日の課題の一つだろうと思っております。

(佐藤会長)

ありがとうございます。

他にいかがでしょうか。

(高野(和)委員)

15ページまでと関連すると思いますが、事前に資料をみて違和感を覚えるところがありまして、それが今の松本委員のお話をお聞きしてちょっと見えてきたかなと感じています。

22ページの「重点的に取り組むプロジェクト」の図は、この答申の肝になるような気がしていますが、この3つの円の左下の「県民参加による共創と協働の“観光地域づくり”」は、どちらかというソフト面の施策だと思うのです。右下の“信州ブランド”の磨き上げと国内外への発信は、ブランドの施策だと思います。こうしてみると1番上にあるプロジェクト「山岳高原を活かした”世界水準の滞在型観光地の形成」が今回の答申のタイトルになりそうだと感じます。

前回この部分は、「世界水準の山岳高原リゾートづくり」というネーミングでした。では、どういう場所を目標にするのですかと私が質問したところ、スイスの観光地をめざすということで写真付きの資料が配られたのですが、ちょっと違和感がありました。やはり信州には歴史や文化が延々と受け継がれている地域がたくさんありまして、湯田中渋ですとか諏訪ですとか、古くからそういう伝統・文化があります。それを「世界水準の山岳高原リゾート」と決めつけてしまいますと、そういったところを引き上げていくのが難しくなってしまうのではないかと思います。前回発言させていただいたところです。

今回は「山岳高原を活かした”世界水準の滞在型観光地の形成」とされています

が、県内どんな地域に行っても山岳高原を活かせるということであればこの表題のとおりかと思いますが、ただ、23ページの「主な取組」を見ますと、やはり偏りを感じます。1番は登山道や山小屋の関係ですし、3番は山岳高原を活かした滞在プログラム、4番がスノーリゾート、5番が登山案内人ということになりますと、かなり山岳地域に偏向している気がします。

当初のビジョンづくりの際には、自然と生きる、美しく生きる、きれいな水が根本になっているなど色々な素晴らしい言葉が出ていたと思います。そういったものがこのようなプロジェクトのネーミングでは伝わりにくいのではないかという疑問があります。

これが今後答申されるとなりますと、一番上のプロジェクトがタイトルとなりそうな気がしますので、もう少しここで皆さんにご意見をいただいて調整ができればと思います。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

他にございますか。

(井上委員)

観光で1番大事なことがすっぱり抜けているという印象があります、食のことがほとんど出てこない。農業とかそういうのは出てくるのですが、その辺りが「おもてなし」とも絡んで1番大事ではないでしょうか。ブランドのプロジェクトで「主な取組」として土産物とかそういうものまで広げて書かれてはいるのですが、それがさらっと流れて出てこないという印象です。

食は長野県の強みでもあるはずですし、先ほど松本委員から「暮らし」ということが出たのですが、「暮らしの中の食」というのは本当に重要な位置づけですから、そういうものがもっと明らかになればいいのではないかという感じがしました。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

(松本委員)

私は前回出席できなかったので質問させていただきたいのですが、前回の審議で「山岳高原を活かした世界水準」という言葉が出てきたのですか。

(佐藤会長)

いえ、その前、2回位前からです。

(松本委員)

それはワン・オブ・ゼムで出ていたことは認識しているのですが、これが中心になるというのは前回だったのですか。

(佐藤会長)

前々回だったでしょうか。事務局の皆さん何か残っていませんか。

(浅井観光企画課長)

前は「世界水準の山岳高原リゾートづくり」というネーミングでご説明をさせていただきました。その際は先ほどもお話ししたのですが、「リゾート」という言葉に違和感がある、長野県が「日本のふるさと」を売りにしようとする時に「リゾート」という言葉はおかしいのではないかということで、タイトルをもう少し検討して欲しいというご意見をいただいた経過がございます。

それを受けまして、少し尖った部分を見せながら取り組むのがプロジェクトの趣旨だと思いますので、長野県の最大の売りである「山岳高原」を活かすことを少し特化した形を出していきましようということでございます。ただ、次のプロジェクトの中で「観光地域づくり」という言葉を使っております。これはそういう意味では全県が対象になるものでございまして、全体的にカバーはしながら、ただ、見せ方として1番目の山岳高原のプロジェクトでは少し特化した形の言い方をさせていただいた、このような経過でございます。

(佐藤会長)

このことは前回の審議でも議論がありましたよね。これは何でここに書かなければいけないのかという質問に対して、当審議会の審議と並行して進められている上位計画の総合5か年計画の審議の中で「アジア最高水準の山岳高原リゾートづくり」という言葉が出てきた、それを踏まえ観光の計画でも受け皿となるプロジェクトが必要という説明を事務局からうかがった気がします。

前回もご審議いただいていた、今から議論を戻すというのも難しいので、どう折り合いをつけるのか、その辺りの調整を委員の皆さんでやっていただくということになろうかと思えます。

事務局の方で説明することはありますか。

(浅井観光企画課長)

県の総合5か年計画でございますが、参考資料1の1として答申の概要をお示ししてございます。その「5年間の取組」の中で「信州未来プロジェクト」として9つのプロジェクトが掲げてございますが、その1つとして「世界水準の山岳高原リゾートの形成」がございまして、総合計画審議会から県の新しい総合5か年計画の中でこういったプロジェクトをやっていた方がいいのではないかと答申をいただいております。それを踏まえて、こちらでご審議いただいている観光振興基本計画でも対応したプロジェクトを掲げてはどうかという提案をさせていただいております。

(佐藤会長)

今の事務局の説明も踏まえていただいて、この審議会としての考え方を決めていきたいと思うのですが、他にご意見はございますか。

(駒谷委員)

私の記憶では第3回の審議の後に公表された「中間とりまとめ」の中で「山岳高原リゾート」という言葉が初めて出てきたと思うのですが、その際は時間がなくて議論はしていなかったと思います。

ただ、全般的にみれば、プロジェクトのところに今あるような「山岳高原を活かした」という意味合いよりも、当初に議論した長野県の良さというものがもっと色々あると思います。ですから、ここでこういう形で表現されると、「山岳高原」という言葉が非常に強い表現になっているような気がします。

ですから、私は、ここに「山岳高原」という言葉を入れるのもいいのですが、もうちょっと違った表現で入れた方がよろしいのではないかと思います。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

前回の審議の発言要旨につきましては各委員のお手元に配られておりますので、目を通していただければと思います。はじめに「山岳高原リゾート」の問題が取り上げられておりまして、その概要がここに記載されております。

事務局の方で何かありますか。

(浅井観光企画課長)

もう1点補足させていただきます。

審議会の方で当初は「信州暮らし」とか「自然と共に生きる」という議論をしていただきました。その辺りにつきましては、資料3の17ページから18ページにかけて「長野県観光のめざす姿」として記載させていただいてございます。めざす姿の1つ目が「信州暮らし」を楽しみ、発信」でございまして、その中で記載させていただきました。「身近にある豊かな自然や美しい景観、伝統や文化など、信州らしさを大切に守り続けるライフスタイル「信州暮らし」を楽しみ、誇りと愛着を抱きながら…」という形で、審議会でのご議論についてはめざす姿の1番トップに掲げさせていただいたということでございます。

(佐藤会長)

それでは、私の方から、ただ今の皆さんからのご意見を踏まえた上で、代案を提案させていただきます。

1つ目のプロジェクトについては、「山岳高原を活かした」という部分を変更して、「山岳高原など豊かで美しい自然環境を活かした世界水準の滞在型観光地の形成」としてはいかがでしょうか。これは色々な要素を単純に統合した形ですが、この部

分で1回分時間を使うというのはなかなか難しいので、この辺りを折衷案としてはどうでしょうか。

それから、先ほど食についてのご指摘がありました。3つ目の「信州ブランド」のプロジェクトに関わって来るのだらうと思います。私にはタイトルにある「信州ブランドの磨き上げ」というのがよく分からないのでこの表現も再検討しながら、食とかその他の要素が想起できる内容に変えることはできないだらうかというのが、皆さんからのご意見を踏まえて気付いたところです。ここは可能であれば、例えば食や信州の物産、あるいは「こと」などを国内外へ発信していくという方向性で膨らませることが可能ではないかと感じています。

(浅井観光企画課長)

25ページの「信州ブランド」のプロジェクトの関係ですが、食の魅力向上や物産の振興は大きな柱と考えておまして、「主な取組」の2つ目に含めてございます。具体的にはワインのブランド化ですとか、農政部で取り組んでいる「おいしい信州ふード（風土）」、そういったものを想定したものでございます。

(佐藤会長)

委員から食という言葉を入れられないかというご意見があったので、プロジェクトの見出しを書き換えられないかという提案をしています。内容的には、確かに食文化、ワインといったことが書いてありますので。

今回事務局から提案されたタイトルにしておくか、食などということもタイトルに出すか、委員の皆さんがどのようにお考えか多数決で決めたいと思います。ブランドのプロジェクトに食とかそれにちなんだ言葉を入れるという私の提案に賛同いただける方…4人。残りの皆さんもご検討をお願いします。

(松本委員)

今決めなければならないのは、この3つのプロジェクトの図をここで確定するということなのですか。

(佐藤会長)

おっしゃるとおりです。

今回の審議の柱ということになります。3つの大きな傘についての議論です。その下に具体的な取組がたくさん入って来るのだらうと思います。

(松本委員)

答申をする際に、例えばこの3つの輪が1番表に出てくるということになるのですか。

(佐藤会長)

今回の答申の中身は何かと聞かれた時に、重点的に取り組んでもらいたい項目と

して3つのプロジェクトを説明することになります。その他の具体的な取組については、観光産業の振興や人材育成といったこともやらなければいけないのですが、それらは3つのプロジェクトを支えるために必要な要素になる、こうした組立てになっていくのだろうと思います。

(高野(和)委員)

最初にみた時に感じたのですが、他の委員の皆さんもプロジェクトの輪の位置づけがどのようなものかということが取りにくかったのではないかと思います。

というのは、例えば先ほどの事務局のご説明の中で、山岳高原は1つ目のプロジェクトに入れるけれども、平地温泉の方は2つ目の観光地域づくりのプロジェクトでいいではないかというお話も出たわけですが、そういう形だと分かりにくくなると思います。地域ごとなのか業態ごとなのかというお話になってしまうと余計に分かりにくくなってしましまして、全部県全体のことなのだけれども、観光振興のアプローチの仕方を3つのポイントに絞ってやっているという感じに整理して、委員の皆さんにご検討いただかないと難しいのではないかと思います。

ですから、1つ目のプロジェクトは、滞在型観光地、滞在観光プランをつくったり活性化させていこうという話だと思うのです。2つ目の「観光地域づくり」は、プラットフォームの仕組みをつくるプロジェクトで、3つ目の「信州ブランド」はハードもソフトも、食も自然環境も、お店や施設も含めて、信州ブランドとして何を発信していくかというプロジェクトだと思うのです。

ですから、このプロジェクトの3つの輪が何を意味する輪なのか、ということを確認にした上でプロジェクトのタイトル付けをしていった方が分かりやすいのだと思います。

(松本委員)

このような3つの輪でプロジェクトをつくるということは、前回議論された事なのか。

(浅井観光企画課長)

3回目の審議を踏まえて公表した「中間とりまとめ」では、言葉は若干変わっているかと思いますが、3つのプロジェクトのタイトルは出ております。今回のように3つの輪でお示したのは、その1つ1つが独立したものではないというイメージをお示ししたかったという趣旨で、今回が初めてでございます。

それぞれのプロジェクトが関連し合いながら、または部分的には施策を重複させて連携しながら推進していきますというイメージをここでお示しさせていただいたところでございます。

(佐藤会長)

プロジェクトをこのように3つの輪を重ねて表してしまうと、重なっている部分はどのように考えたらいいのだろうかとか、真ん中のコアが本当に大事だとしたら

これは一体何なのだということが分かりにくいので、3本の柱で表す方がいいのかもしれない。

(松本委員)

提案されているプロジェクトの1つ1つに反対しているわけではないのですが、我々の審議会での論議で一番中心となったポイントは、「長野県観光のめざす姿」だったと私は認識しています。

その中で基本にあったのは、長野県に住んでいる私たち自身が楽しめるようなそういう場所をまずつくらなければいけないということが根幹にあったのだと思っております。それは一体何かと言うと、健康的な農作物がつくられていて、美しい水があって、そういう場所が大切だということが議論され、それが結果として人々を呼ぶことに繋がるのだという認識が基本にあったと思うのです。

ですから、この3つの輪の重なっている部分に「県民1人ひとりが「信州暮らし」を楽しめる長野県をつくる」ということがあって、その上でそれをベースに、例えば「山岳高原など自然環境を活かした」という言葉が入ってきたり、色々なものが入ってくるというのであれば納得できるのですが、根幹の思想がないと、この3つだけやりますよとみえてしまうのです。

我々が論議してきた中で1番大切だったことは、どういう長野県だったら我々は人を呼べるのだろうか、そこだったと私は思っているのですが、皆さんのご意見を聞かせていただければと思います。

(佐藤会長)

ただ今松本委員の方からご意見がありました。色々な角度からの見方があると思えます。確かに最初にそういうお話もあったのですが、もう1つは長野県の観光産業が抱えている課題というのもありました。これらの課題へのアプローチとして、まず県民が幸せになることが第一なのだという考え方がある一方で、では今困っている観光産業をどう支えていったらいいのかというご意見もありました。持っているさまざまな要素を活かしきっていないのではないかとこの角度からのご意見も確か議論に出てきたと思います。そのような中でこういった形が生まれてきていると僕は感じています。

皆さんのご意見はいかがですか。ここは非常に重要なポイントなので、長野県の観光ビジョンというところですので、やはり皆さんと共有しておきませんとこの先ばらばらな方向に行ってしまうので、ご意見をいただきたいと思えます。

(花岡委員)

これまでの議論に参加してきておりませんので発言するのが怖いのですが、私は食をブランドの中に入れるということが非常に気になっております。食材はブランドではあるけれども、食そのものがブランドというのは非常に難しいのではないかなと思っております。信州には世界的なブランドとして通用する食材がいっぱいあるということに異論はないし、そういうものとして色々な食材を観光面からも育て

て宣伝していかなければいけないということに関しても異議はありませんが、ブランドの食材を使ったらその食はブランドかと言えばそれは違うのではないかと思います。食というものに関しては、若干違う観点が必要なのではないかという気が漠然としています。

よく「山のマグロ」という話を聞きます。信州は、「おもてなし」ということが先行して、本当の「おもてなし」ができていないのではないかという提言を過去にされておりますが、そこをどう脱却するかということが重要で、「おもてなし」という言葉を過去と同じように使ってしまうと同じようになってしまわないかと感じます。今回お話をお聞きしていたら、「おもてなし」ではなくてプライドの方が大切というか、へりくだって「おもてなし」をするのではなくて、「信州暮らし」は素晴らしい」と胸を張って威張って見せることの方が大切なのではないかと感じていて、食に関しても信州の食を見直すということは必要だと思うのですが、ブランドの中に含めてしまうと難しいのではないかと課題を乗り越えられないのではないかという気がします。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

先ほどの松本委員のお話は、資料3の17ページ、「長野県観光のめざす姿」で、ご意見を参考にさせていただき形で記載されています。我々の長野県に住む誇りや楽しみ方などを中心としためざす姿はここに書かれているとおりののですが、これを踏まえて3つの分野にプロジェクトを展開しようとする際に、実は、「県民1人ひとりが「信州暮らし」を楽しみ、発信」という部分から、「山岳高原」の方向に流れてしまったようになっているから、なかなかうまく噛み合っていないという感じがします。対して、他の2つのめざす姿については、プロジェクトに落とし込まれているということなのです。

(玉沖委員)

よろしいですか。

2点ありまして、1点目は先ほどの「山岳高原」ですとか「ブランド」のプロジェクトに関係するのですが、「温泉」という言葉をここに表記する必要はないですかという問いかけです。なぜなら、県の方でとられた長野県の魅力についてのアンケートで温泉は2位になっていますし、色々なアンケート調査でも長野県への来訪意向で温泉の支持率は高くなっています。そこを意思をもって「ここでは温泉という言葉は使いません」ということを決めるのであれば、それでいいと思います。もしくは先ほど「山岳高原」の表記の部分で、会長からご提案のあった「豊かで美しい自然環境を活かした」の「自然環境」の部分に含まれているというのであれば、それはそれでよしで、ブランドなのだということであれば「ブランド」に加えることもよしで、この3つのプロジェクトで温泉について触れるのか触れないのかということが1点です。

もう1点は資料3、11ページ冒頭の「来訪客に日帰りではなく滞在してもらおう」

という文章の問題なのですが、この言葉だけを聞くと何だか日帰り観光客はいらなくて宿泊客が欲しいと聞こえたり、日帰り客に宿泊してもらいたいのか、今の日帰り客を維持しつつ宿泊客を増やしたいのか、それとも日帰り客も来て欲しいし宿泊客も増えて欲しいということなのか、受けとり方によってはイメージが悪く映ることがあるので、1番近い意思に合わせて表現を整えたらどうかという印象を持ちました。

以上でございます。

(佐藤会長)

ありがとうございます。

今の温泉のお話ですが、資料3、14ページの「長野県観光の強み」の部分で「豊富な湯量に恵まれた温泉」と入っている位です。

議論がだいぶ多方面から出ているので、1度軌道修正をさせていただきます。今ご議論いただきたいのは、第1編「現状と課題」の部分であり、資料3でいうと1ページから15ページまでについてご意見をいただいています。その先の第2編「長野県観光のめざす姿」や第3編「施策の展開」の部分にだいぶ足を踏み込んでしまっていますので、もう1度軌道修正していただいて、まず「現状と課題」の部分はこのような記載、内容でよろしいか、もう1度ご確認をいただきたいと思います。この部分は皆さんからいただいた多くのご意見が盛り込まれていますので、ご異論がなければ、OKとさせていただきます。

次に、第2編「長野県観光のめざす姿」、17ページから20ページです。先ほど松本委員からご意見がありました「めざす姿」についても、皆さんの統一した見解としてこのような形でまとめていいでしょうか。「めざす姿」は1つ目が「県民1人ひとりが「信州暮らし」を楽しみ、発信」する、2つ目は「地域全体で魅力を高める「観光地域づくり」、3つ目は「信州のブランド力を高め、国内外から選ばれる長野県へ」となっていますが、方向性としてこれでいいでしょうか。そして、19ページでは達成目標としてこのようなゴール設定をしましょうということが追加されています。

19ページの達成目標に関連して1点お願いします。長野県は、顧客満足度や観光消費額などの統計データをしっかりとっている方なのですが、例えば1人当たり観光消費額が3,600円であり、宿泊しても6千円程度なので、実際にそうなのかと感ずることがあります。それから長野県でまとめる観光の満足度も40%程度と低くなっていますが、果たしてそうなのでしょう。例えば「じゃらん」さんとかJTBさんなどの測定では、長野県の観光満足度はもっと高く出ています。そういう意味で、これまでの測定方法にとらわれない統計データの出し方、選び方を考えていただきたいというのが私の個人的な意見です。

(花岡委員)

確認なのですが、資料3、19ページの「外国人宿泊者数」は、「外国人の宿泊数」が正しいのではないのでしょうか。

(佐藤会長)

はい。外国人の宿泊の統計は、人数ではなく、延べの宿泊数をカウントしているはずなので、表現の検討をお願いします。

よろしいでしょうか、それでは、第3編「施策の展開」、21ページから32ページまでを審議します。非常に中身のあるところですが、先ほどの議論の延長ということでご意見を賜りたいと思います。

(高野(和)委員)

今までのお話を聞いて私が感じたのが、先ほど会長もおっしゃいましたが、プロジェクトの名前をつける際に、めざす姿の1つ目の「信州暮らし」を楽しみ、発信」という項目が、長野県総合5か年計画の「山岳高原リゾート」という言葉の影響を受けて、変わってしまったような気がします。

そこが全ての違和感の発端になっているような気がしてしまいますので、ここをどうにかしないと皆さんが納得されないのではないかと思います。

(佐藤会長)

高野登委員、何か意見ありませんか。

(高野(登)委員)

出席できなかった期間があるのでちょっと流れが分かりにくい中でお話させていただきますが、めざす姿の「信州暮らし」を楽しみ、発信」というのは、これは今どこの企業も、地域社会や自治体もやっている「共感発信」という意味でいえば、「共感できるライフスタイルを発信していく」ことは観光の一つのあり方になりうるので、非常に面白いと思います。「観光」の元々の意味は「光を見せる」ということですから、「光るライフスタイル」が確立されていれば、これは観光要素として非常に強みになると感じます。

たまたま数日前に佐賀県の武雄市に行っていたのですが、そこでは地域住民が生活を楽しみ、それをオープンにしている、とても光っていました。長野県の至近な例でいえば小布施が1番近いのかなと思いますが、武雄市は小布施をさらに超えているような感覚があって、「武雄暮らし」という感じで発信できるレベルまでいっているのは見事だと思ったところです。

その延長線上ということになるのかもしれないのですが、プロジェクトの3つの輪が色々な議論に繋がっていくことは、全然悪くないと思うのです。「山岳高原」という表現も、長野県の地形をみれば、あまり山岳高原とはいえない場所もあるとはいえ、やはり山岳高原が圧倒的に多いので、それを「世界水準」という言葉で表すのも面白いから良いと私は思います。

ただ、1番最初の議論で私がいっていた「長野県を「おもてなし県」という位置付けにしてはどうか」ということからいうと、この3つの輪をさらに囲む大きな輪があって、それが「おもてなし」という位置付けになっているのが私の最初からの

イメージなのです。

その中で、例えば「おもてなし」には「振る舞い」「しつらい」「装い」の3つの要素がありますが、「山岳高原を活かした世界水準の滞在型観光地」は間違いなく長野県として「しつらい」を外に問う形になると思います。「県民参加による共創と協働」は県民がどうあるべきか、つまり「振る舞い」に繋がってくると思います。「信州ブランドの磨き上げ」、「磨き上げ」という言葉が適切かどうかは私にもよく分かりませんが、これは、ブランドとして外に目に見える形で取り組むとすれば、信州のブランドとしての「装い」に繋がる。こうした意味でいうと、「おもてなし」という1つの大きな輪の中でこの3つの輪が「しつらい」「振る舞い」「装い」という形で支えていると考えれば、成り立つと思うのです。

ただ、観光振興計画という縛りの中で議論しているので、私としてはもう少し大きく「おもてなし」という傘の下で議論したかったのですが、「じゃあ食の問題をどうする」とか、どうしても個々のものが出てきて議論が少し窮屈になっているのではないかと感じます。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

段々難しくなってきましたが、僕はこの3つのプロジェクトが重なっている部分に「おもてなし」の心を入れるのかなと思っていたのですが、高野登委員からは逆に「おもてなし」で3つの輪を大きく括ったらどうかというご提案がありました。僕も最初にこの3つの輪を括る輪は何だろうと考えていました。高野登委員は「おもてなし」とおっしゃいましたが、僕は「長野県の持続可能な環境」ではないかと思っていました。長野県の持続可能な環境の中で人々が暮らしを営み、3つの輪の重なった中心に「おもてなし」があれば、おそらく最高の観光ができるのではないかと、こういう図を書いたこともあったのですが、今のお話では外枠が「おもてなし」で、3つの輪が「しつらい」「振る舞い」「装い」というご提案でした。確かに「おもてなし」の3つの要素で説明すればわかりやすく胸にすんと落ちてしましますが、皆さんはいかがでしょう。

今のお話を参考にさせていただいてプロジェクトを「おもてなし」で説明するとなると、プロジェクトとして具体的に何を組んだらいいかという次のステップが出てきます。そこにはここに書かれていないものがいっぱい出てくるのではないかと予想できますが、皆さんはいかがでしょう。他にご意見はございませんか。

(野池観光部長)

事務局から一言お願いします。

資料3、22 ページの一番上の○の2行目に「重点的に取り組むテーマを設定して」という記述がございますが、ただ今の高野登委員のお話をお聞きしていて、お示ししている3つのプロジェクトがどうしてテーマとして上げられたのかということが明確でなかったのではないかと感じました。ここまでのご議論をお聞きして、長野県観光のめざす姿の実現に向けて、ストーリーを明確にして取り組む必要があると

いうことではないかと振り返らせていただきました。

つまり、単に3つのテーマというよりもストーリー性なのかと思ひまして、この2行目をこの3つの輪の意味が明らかになるように修正させていただければいいのではという感想を持たせていただきました。

(佐藤会長)

ストーリーとは、どのようなものですか。

(野池観光部長)

単にプロジェクトの「テーマを設定」としますと、山や高原があるのだからここには温泉も入ってくるのではないかと、色々と議論が出てくるかと思ひますので、3つのプロジェクトの関係を整理する方法として、1番上にあるものは、表現は別として、長野県の強みをとにかく徹底的に活かすプロジェクトであって、その下の2つは、ではどのように活かすかとしたときに、一つは観光事業者の皆さんだけではなく県民総参加でいたしまししょうという手法であり、もう一つはどのように内から外へ発信していきまじしょうかというように、三者の関係が単に3つのテーマがあるということではなく、ストーリー性を持たせた方がいいのではないかという気がしています。

単に「テーマが3つあります」とくくったやり方が色々と整理の難しさに繋がっているのではないかと思ひたのですが、いかがでしょうか。

(佐藤会長)

この3つのプロジェクトは一つの流れだということですね。

第一の問題は「“山岳高原を活かした”世界水準の滞在型観光地」というプロジェクトだけをストーリーの主人公にしていいのかという議論です。この部分に皆さんが違和感を覚えたのです。委員の皆さんからは、それよりも最初に議論しためざす姿が主人公なので、それを実現するためにどうすべきかをテーマにすべきというご意見が出ています。

ストーリーとなると、文章をかなり組み替えて、つくり直さなければいけないということになりますね。確かに書き変えた方がいいとは思ひます。

(松本委員)

さっき佐藤会長がおっしゃった、「自然環境を楽しむ心」というのが3つのプロジェクト全てを繋ぐキーワードだと思ひます。そうすると、「住む人も来る人も長野県の自然環境を楽しむ心を大切にしよう」というのが3つのプロジェクトの上に入れば説明できるのではないかと思ひのですが、いかがでしょうか。

(佐藤会長)

3つのプロジェクトを包む大きなフレームとして、「住む人も来る人も、住んでよし訪れてよしの自然環境」が全体の傘になれば、説明できるというご意見です。概

念とすれば、住む人も来る人も一緒に楽しめる長野県の自然環境を誇るべきということですね。なんかよさそうですね。

とすると、この中には来る人、住む人という関係として、「おもてなし」ということが含まれてきます。高野登委員、どうでしょう。

(高野(登)委員)

それでは収まりが良すぎるような気がします。それと同じようなことは他の県でもみんな言っています。私は今、山梨県とか佐賀県のお手伝いをさせてもらっているのですが、同じようなことは当然議論の途中で出てくるのです。

そこで、やはり「圧倒的に違うものは何か」という議論をしていかないとブランドってなかなかできにくいところがあって、「おもてなし」というのは謙虚さが出てくると私は思うのですが、やはり「もてなし」ですから、「何を持って何をなすか」ということを原点にして、「信州に生まれた人間としてどういう暮らしをするのか」ということを観光に結び付けられるレベルまで高め、それを外に発信していく方が面白みが出てくると思うのです。

会長のご提案は、耳ざわりも非常にいいし、文章的にはそのままきれいに収まりますが、それが出来上がってその文章から何が生まれるのかということが次の大事なステップだと思います。文章化するのが目的ではなくて、そこから生まれてくる行動が1番大事な部分なので、文章を読んだ県民1人ひとりが具体的な行動を想起させないと、圧倒的な強みに繋がらないのではないかという気がします。

(松本委員)

観光に携わる人にとってみれば「おもてなし」というのは非常に深く考えている言葉なのですが、ここの目標の中に「おもてなし」という言葉をポンと入れてしまうと、例えば農業をやっている人だとかサラリーマンの人だとか、そういう人達は「俺たちには関係のない世界」と思ってしまうのではないかと思うのです。おっしゃる意味はとてもよく分かるのですが、この観光計画で今私達がやろうとしていることは、今までのような観光関係者だけに向けた指針ではないのだと思うのです。

そこに住む人達も含めていい長野県をつくり、そこを訪ねてもらえば嬉しい、ということですから、「おもてなし」という言葉をバンと頭に出してしまうことには不安を感じます。

(佐藤会長)

はい、お二方の意見は非常によく分かります。

収まり過ぎていけないというのは確かで、どこでも使える言葉では困ります。そういう意味では、先ほど高野登委員から突き抜けた表現にすべきだというご意見がありました、いかがでしょうか。

「住む人も来る人も日々感動し続ける信州」という感じで、これは「信州」という部分が大事でどこの県でも使われるものではない、東京とか神奈川とか山梨とか、あるいは山形とか秋田とかそういう所ではこういう言葉は使わないだろう、あるいは

は使えないだろうという表現で、この信州で住む人も来る人も自然環境に囲まれて感動する、ということが打ち出せれば、この3つのプロジェクトに繋がっていきそうな感じがします。これは私の個人的な考えです。

(熊谷信州ブランド推進室長)

ブランドの立場で、事務局から一言申し上げたいと思います。

こちらの審議会の歩みと連動しながら、私達は信州ブランド研究会の方で検討を進めていますが、まさに今のご議論のとおり、ブランドの議論でも自然で他県と差別化ができるのかという点が論点になっております。

こちらの審議会で長野県観光のめざす姿としてご提言いただいた「信州暮らし」にブランドの議論も影響を受けておりまして、ライフスタイルこそがこれからの日本や世界に向けて提案できるものではないかということで、この「信州暮らし」というのは、ブランドの議論においても「信州らしいイメージ」であると考えております。

それともう1つ、他県に誇れる観光計画とするために、この「信州暮らし」とともに県民の参加、会長がおっしゃったように「県民も楽しんで、豊かさや幸せを感じる」ということが今回の特徴になるかと思っております。

そういうことを考えると、もう1点だけですが、プロジェクトとは何だろうか、このようなめざす姿をイノベーションしていく、いわゆる自然に頼る観光ではなく、これからは「信州暮らし」を県民が喜びながらイノベーションしていく、それをリードするのがストーリーということになりますので、先ほど観光部長が申しあげましたように「信州暮らし」を県民みんなで良くしていこうというストーリーであれば、この3つのプロジェクトは「観光地域づくり」をまず1つ目に据え、2つ目としてはそれを「滞在型観光にする」という形にし、それを「ブランドとして確立し発信する」という順序立てにして、イノベーションをリードしていくという形がいいのではないかとということです。今「①→②→③」となっている並びを「②→①→③」という順番でストーリー立てて進めてはどうかということ事務局からご提案したということでございます。

長野県らしい観光振興基本計画とは何かと考えた時に、今回は「信州暮らし」を県民みんなで作って上げていく」という形が非常にいいストーリーになっていくのではないかと感じます。

(岡庭委員)

この審議会は長野県観光の復興のための審議会であると考えてみた時に、どういう答申にするのがいいのか、今観光で本当に苦労している皆さんにどれだけ応援を送ることができ、頑張ろうという気持ちになってもらえるのか、地域で直売所や色々やっている人達にこれを道しるべとして元気を出して頑張ってもらえる、こうした答申である必要があると思っております。

今の皆さんのご議論を聞いていまして、県民がいかに力を合わせてよい県をつくるのかというトータルな計画は別にあるわけで、ここは観光振興のための審議会

すから、僕はプロジェクトの3つの輪は非常にうまくできていると思っているのです。

長野県観光が今まで忘れていたものは、長野県観光の持つポテンシャル、つまり何を売っていくのかという点で、私もこの前は山岳観光にちょっと違和感を覚えたわけですが、長野県観光を発信していく際には「山岳高原」というのは、1つの象徴的な言葉としていいのではないかと考えております。

だから、「山岳高原」「県民参加」「ブランド」のプロジェクトの3つの輪が、輪が重なるコアの部分を支えていくということだろうと思います。この重なっているところに非常に意味があると感じていますが、この部分は、「信州人としての誇り」とか「信州暮らし」とか、あるいは「自然環境を守ること」とか、普遍的なことが真ん中に座っていて、ここが1番重要ではないかということです。

それから、「県民参加」と「山岳高原」の重なっているところは「美しい観光地をつくろう」ということになるし、「ブランド」の部分も重要で、商品化しないと観光産業はうまくいかないわけですから、まさに信州ブランドを商品化していくということだと思います。

こうしたことによって長野県観光を復興していこうととらえていけば、僕はこの3つの輪は非常にいいのではないかと考えます。ただ、輪を重ねて描いただけなので、輪の重なる部分が何を意味するのかということを中心に説明できれば、県民の皆さんにも十分に分かっていただけるのではないかと考えます。

(佐藤会長)

岡庭委員からご意見が出ました。この答申は何のためにするのかということもありますが、これを読み、アイデアを受け取った観光事業者なり県民が元気にならなければ本来の役割が果たせないだろうというご指摘でした。

その際、人々に理解してもらおうきっかけとして、象徴的なポイントをピックアップしながら、それらの関連性を皆さんに示していくというのもいいのではないかと考えました。

例えば「山岳高原」「観光地域づくり」の2つのプロジェクトの重なる部分には、「郷土を愛し自然を守る心を育む」というような言葉が出てくる。「ブランド」のプロジェクトは商品化のことだということで、僕も胸に落ちました。

3つの輪のコアの部分については、誇りや暮らしといった言葉を岡庭委員はおっしゃって下さいましたが、皆さんいかがですか。

(高野(登)委員)

今、頭の中が整理できて、とてもいいアイデアをいただいたと思います。

考え方だと思うのですが、「山岳高原を活かした滞在型観光地」というのは「もの」です。「観光地域づくり」、これも非常に分かりやすいですけど、「もの」になります。「信州ブランド」、これは商品化して目に見える形にしていくもので、これも「もの」だと思うのです。それで、この3つが重なった真ん中にあるのは、さっき野池部長がおっしゃった「こと」だと思うのです。「もの」が重なっている中に1つの「こ

と」が生まれる、それは何かというと、これが物語、ストーリーです。

そのストーリーとして、今回1番はじめに議論が出てきていたビジョンがこのど真ん中の重なった部分に見えてくる「こと」だと思うのです。どのような「こと」を外に対して発信し、共感を生み出していくのか。その中で、「こと」ですから目標値ではなく若干具体性に欠けていいのですが、やはり「毎日笑顔があふれるような「信州暮らし」ということが長野県観光のめざす姿であるならば、それは「こと」であり、物語を生み出す1番ど真ん中にあるものではないかなという気がするのです。

だから「こと」がこの3つの「もの」をきちんと真ん中の求心力で支えて、それが物語を生み出す源泉になっていく、そういうとらえ方をすると、この3つは非常に分かりやすくなってきたという気がします。

(佐藤会長)

ありがとうございます。

そうすると、この3つの輪の外側にある「おもてなし」というのはどうしますか。

(高野(登)委員)

おもてなしは何においても優先される「ざる」であり、「ざる」の上に色々な「もの」が乗っかるのです。

この真ん中にあるのはビジョンであり、やはり「こと」ではないかなという気がしています。この部分は総括をするものではなく、私の感覚では、全体を総括するのはやはり「おもてなし」です。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

「おもてなし」は見えるようで、ここには書かないということがあってもよろしいですか。

(高野(登)委員)

問題は、これを全県民に伝えなければいけないということですよ。

(佐藤会長)

そうです。そこが問題なのです。

(高野(登)委員)

ここで完結しているのであれば、それでいいと思います。

(松本委員)

私も岡庭委員のご意見に大賛成なのですが、この重なった部分に関していえば、「観光地域づくり」と「山岳高原」には、自然環境の保全の問題が当然入ってくる

し、「自然と共に生きる」ということも入ってくるのですが、そういうことがいくつか重なった部分は何なのかということ、先ほど野池部長がおっしゃったようにストーリーにしていくことが必要だと思うのです。

これを今この場で文章化するのはちょっと難しいと思いますので、今はこの重なった部分を分かりやすい言葉にするということで、この3つの輪で議論を進めてはいかがでしょうか。

(佐藤会長)

この部分は3人の委員からいただいた方向性でいいのではないかと思います、この3つの輪の読み方をもう少し明確にまとめていきましょう。

それでは3つの輪を見ていただきます。「山岳高原」を活かした取組、それから「観光地域づくり」の取組、そして「信州ブランド」の取組、この3つとそれぞれが重なった部分についてプロジェクトの中に落とし込んでいくということ。そして3つの輪が重なり合うコアの部分、これは全体を繋ぐストーリー、長野県観光のめざす姿、誇り、暮らし、美しい生活といったものがこの部分を占めるということでしょうか。そして、表記はありませんが、全体をカバーしてぼんやりと見えるのが、長野県民の「しつらえ」、「振る舞い」、「装い」といった「おもてなし」なのだということが前提になっているとお考えいただく、こういうことでしょうか。

ご異論がなければ、そこがまとまると後はどちらかという具体的な事例を埋めていく作業になりますから、特に大きな問題はそれほどないような気がします。

よろしゅうございますか。

(松本委員)

真ん中のコアになる言葉を「信州暮らし」にするということでしょうか。

(佐藤会長)

はい。

(岡庭委員)

この前の審議では、自然などをおすそ分けする気持ち、「おもてなし」と「おすそ分け」ということが話題になったと思うので、そこを何か表現できればいいのではないかと思います。

(佐藤会長)

そうですね。どのように表現できるのか、自分たちの誇りや幸福感を来訪者にも、おすそ分け、つまり、体験してもらい味わっていただくというスタンダだと思うので、その辺りを文章としてどのように表現すればいいかは野池部長に頑張ってくださいと思います。

それでは資料3、23ページ以降です。今の3つの輪に基づいて、輪が重なる部分

も含めて、いくつかのアイデアが埋め込まれています。この部分についてご意見をいただきたいと思います。

今の3つの輪のストーリーの方向性で考えると、ちょっと違うのではないかとこの部分もあります。足りないものもあるような気がするので、何かありましたらご意見をお願いします。

(高野(和)委員)

先ほども申し上げたのですが、プロジェクト1、「山岳高原」の中に例えば温泉ですとかそういったものがなさすぎると感じています。玉沖委員からもお話がありましたが、長野県が有数な温泉地であることは全国的にも認識されています。

先ほどの3つの輪の議論の中で、3つのめざす姿の2つ目と3つ目は輪として残ったのですよね。1つ目の「信州暮らし」が大目標として3つの輪の真ん中に入ることで、代わりに「山岳高原」のプロジェクトは具体的な取組として位置付けられる形になったと思うのです。

それであれば、全県下色々な分野での観光の取組や活性化ということを見ると、温泉、歴史ある温泉地や観光地に対する活性化の取組をもっと明確にしていけたらと思います。

(岡庭委員)

さっきも言ったように、「山岳高原を活かした」というのは象徴的な言葉であり、長野県観光はこれだけではないのです。安曇野や温泉もあるということを見ると、23ページの「主な取組」はちょっと「山岳高原」に固執しすぎているのではないかと感じます。そういう意味で、「主な取組」にはもっと長野県の観光全体を見た取組を入れていただくということではないかと思うのです。

我々がここに「山岳高原」という言葉を入れるのは、それが長野県を象徴する代表的なものだからと考えていただいた方がいいのではないかと考えています。

(佐藤会長)

そのようなご意見でまとまったと思っていますので、ここは書き変える必要が出てきます。

(松本委員)

「主の取組」のトップに登山道、山小屋トイレがくるわけですから、僕自身もそうですが、多分皆さんが違和感を覚えたのは、これが当審議会として1番トップに置く取組なのかという疑問だったと思うのです。

(佐藤会長)

プロジェクト1の「山岳高原」については直していきましょう。答申までもう時間がございませんので、修正した内容についてはメールか何かでやりとりせざるをえませんが、その辺りも合わせてご了承いただきたいと思います。

それから、プロジェクト2、プロジェクト3についてはいかがでしょうか。

(松本委員)

プロジェクト2の「趣旨」に「その地域ならではの「信州暮らし」という言葉が入っているのですが、「信州暮らし」の要素はプロジェクト1、3にも入る必要があるのではないのでしょうか。そうするとプロジェクト全体のストーリーが分かりやすくなる気がいたします。

(佐藤会長)

そのポイントは22ページのプロジェクトの3つの輪が重なったコアの部分をどう表現するかにかかってくると思います。「信州暮らし」はコアの部分で1か所、2つ目のプロジェクトがとりわけ住民が関係してくるのでもう1か所ということで、2箇所にあっても僕はいいような気がするのですが、いかがですか。

(松本委員)

もちろんいいと思うのですが、プロジェクト1とプロジェクト3も「趣旨」の部分に「信州暮らし」の要素を入れて展開した方が全体として分かりやすくなるのではないかと思ったのです。

「信州暮らし」を活かした「ブランド」の磨き上げが必要になるだろうし、「山岳高原」を活かして観光地づくりをする際も「信州暮らし」ということが1つのポイントになるような気がするのです。

(佐藤会長)

それはどうでしょうか。そうなると「信州暮らし」が強烈に前面に出てくることになります。全部が「信州暮らし」となってしまうのですが、よろしいですか。

僕は全部「信州暮らし」にして観光と結びつけることに違和感を覚えるのですが、皆さんにご異議がなければそれでいきます。

(松本委員)

ブランド化を進める時のキャッチコピーとして、何が1番いいのだろうかということですか。

(佐藤会長)

はい、そういうことにもなります。

(岡庭委員)

今度の県の観光計画は「信州暮らし」というところに収束したのではないですか。

(浅井観光企画課長)

長野県のライフスタイルを守りましょう、それを活かしましょうというのは筋と

しては通っています。今のご議論をお聞きしまして、資料3、22ページのプロジェクト全体の説明に「信州暮らし」という言葉を入れていきたいと思えます。

プロジェクト1、2、3につきましても、その趣旨は埋め込んでいきたいと思えます。ただ、すべてに「信州暮らし」を使うかどうかは検討させてください。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

それでは資料3、26ページの「県の観光振興施策」をお願いします。27ページ以下にはその内容として、5つの分野の施策の方向性が示されています。

(岡庭委員)

毎回言って申しわけないのですが、現状認識で観光客の入込みが少なくなっている、長野県の観光産業がかなり傷んできているとしているので、そういう点で、例えば村の場合は観光産業をいかに応援するかというのが観光振興施策の中で非常に重要なものになるのですが、県の場合そこを商工労働部に任せてしまう方法もありますが、私とすれば、是非県の観光施策として観光地づくりとか観光産業の強靱化とかそういう施策として支援するというをどこかに明確にさせていただくことで、観光産業の人達にとってこの計画がまさに俺達のものだと感じられるようになるのではないかと考えていますので、よろしくをお願いします。

(佐藤会長)

ポイントはそこでしょうね。

(浅井観光企画課長)

今の岡庭委員さんのご指摘につきましては、例えば資料3、29ページの「来訪者にやさしいハード・ソフト整備」の4つ目の○で、「観光事業者と関係者が一体となった観光産業の振興に向けた方向性の検討の場づくり」や、「観光事業者の競争力向上に向けた取組への支援」を位置付けておまして、この計画には商工労働部の施策も含めた観光振興施策を位置付けることとなりますので、それも当然入れていきたいと思っています。

(佐藤会長)

よろしいですか。この施策をやってくだされれば、県が全面的にバックアップしてくれるのだということが暗黙に隠れているということです。

ご意見ございましょうか。資料3の27ページから31ページに「施策の方向性」「主な取組」が色々ございまして、各地域で展開する具体的な細かなものはそれぞれエリア別に掲げる形になっているかと思えます。

29ページの「来訪者にやさしいハード・ソフト整備」の3つ目の○に「高齢者、子ども、女性の視点」とありますが、その他、例えば障がい者の方達の問題、バリアフリーといったこともあります。世界的にはツーリズム・フォー・オールと言わ

れている分野であります、そうした発想があつていいのではと思います。

長野県は知的障がい者のためのオリンピックゲームもやりましたので、そういう意味ではその辺りが割と世界的に広く知れ渡っているかと思うので、他県では絶対にできない分野、長野県ならではの分野でして、スペシャルオリンピックス、障がい者のためのパラリンピック、普通のオリンピックを開催していますから、こうした実績を利用してもいいのではないかと思います。

(松本委員)

30 ページの「主な取組」に「映画やドラマのロケ支援を契機とした」という言葉があるのですが、支援するのは当然なのですが、もう1歩進めて、長野県が番組を企画して提案していくような積極的な表現に変えた方がよろしいのではないかと思います。

今はテレビ局もそうですし映画会社なんかもそうですが、「こういうものが提案できます」と持ちこむことで随分変わってきますので、場合によっては長野県も資金援助をするということがあれば、さらにそれが進むのではないかと思います。

(佐藤会長)

他にございませんか。

こういう部分は細かく具体的に書くのも難しいと思います。人材の育成では長野検定をやってくれとか、県内の活かされていない人材を掘り起こすための観光ボランティア制度をつくれとか、アイディアは頭の中にたくさん浮かんでいるのですが、県としてやるのであれば、もっと絞る必要があるでしょう。

皆さんの方からは何かないですか。

(高野(和)委員)

今旅館業界では電気自動車の普及に取り組んでいます。また、新エネルギーということで熱交換その他色々な試みをしています。そういったものが「ハード・ソフト整備」に入ればと思います。

(佐藤会長)

電気自動車（EV）も確かに今我々も実証実験をやっている最中で、これも長野県らしさに繋がると思います。

それから28ページの「主な取組」の⑤に健康というキーワードがあります。県の総合5か年計画にも「健康長寿」という言葉が出てきているのですが、観光分野で健康長寿をもう少し深めても面白いだろうと思います。ヘルスツーリズムを展開したらどうかとか、温泉の活用を含めれば強みを活かすことにもなります。ここには「健康長寿を支える食文化」、「健康づくり」とありますが、もっと突っ込んだ観光の形を導入してもいいのかなという気もしています。

これは岐阜県だったと思うのですが、随分昔、岐阜県では外国人の受入・誘致をする時に外国人が1番困っていることを解決してしまおうと、民泊制度・ホームス

テイ制度を取り上げたことがあります。確か岐阜県は県の政策として日本で最初にホームステイを取り上げた県だったと思います。そんな方向性も外国人誘致では考えられます。あるいは彼らが来ているところまで直接迎えに行くということがあっても特殊なケースだからいいだろうとか、そんな形での観光特区のようなものを国に要求できないかとか、バスやら何やら運行するについても特区ということで対応できないだろうとか、そんなもう少し広がったアイデアがあってもいいかなという感じがします。

他にございませんでしょうか。それでは、原案に若干の修正を加えるということをお願いしたいと思います。

次は資料3、33ページの「第4編 エリア別の観光地域ビジョン」。これはさっき私が申し上げましたが、答申の中では項目立てをしまして、具体的な内容については、これだけ広い県ですので、各地域の特性に合わせて戦略を立てていただく部分になります。

それから資料3、35ページの「第5編 計画の推進のために」に役割分担が示されています。これも重要な部分ですが、先ほど岡庭委員からもお話がございましたように、県の役割として、観光振興について縦割りなのか横割りなのかというスタンスの話もございますし、あるいは、地域の観光協会やフィルムコミッションも当然役割分担の中に入って来ると思います。そうしたことを踏まえて県の役割とその他の皆さんの役割、県民の皆さんの役割、大学などの役割ということで、35、36ページに目を通していただきたいと思います。

事務局に1つお聞きします。35ページの4つ目の○に「県と社団法人 信州・長野県観光協会は役割分担を明確にし」とありますが、これは何か特別な意味があるのですか。

(浅井観光企画課長)

県とその外郭団体でございます信州・長野県観光協会との役割のすみ分けをしっかりとすべきというご意見をこの審議会で頂戴しておりまして、それを受けましてこのように明記したものでございます。

(佐藤会長)

というのは、各地域にも観光協会などの組織がありますよね、そういう意味で、この問題は県と県観光協会との関係ばかりではないので、各地域にも何かメッセージとして分かりやすいように記載した方がいいのかなと感じたところです。

(岡庭委員)

これは私がかかなり強烈に言った話でございまして、行政と民間の観光協会の役割はやはり自ずと違ってくると思います。特に観光振興施策を遂行しようとするれば、行政がやったのでは公正とか公平を意識した取組になりがちなのに対して、観光協会がやれば施策に強弱をつけて取り組むことができるので、県としても観光協会が施策を前面に立てて取り組めるような体制を取っていただきたい、という要望を踏

まえた記載だと思います。

(佐藤会長)

では、これは行政と各地域の観光協会や観光関連団体との役割分担を明確にしという方向でいしましょうか。

36 ページの方はいかがですか。

(高野(和)委員)

前日も申し上げたのですが、観光事業者が継続していくにあたって金融機関の力が必要だと思います。36 ページの「一般の事業者」の①に「観光地域づくりに各々の立場で参画します。」とありますが、そのことが含まれているとみなすしかないのか、この下に一文入れていただけるのか、そこを皆さんでお話ししていただきたい。

(佐藤会長)

どういうコメントですか。

(高野(和)委員)

地域の金融機関と特定してしまっているのか分かりませんが。

(佐藤会長)

このようなご提案がありました。資金繰りを何とかしてくれということですね。

そこまで書くのであれば今回僕も要求したいことがあるのですよ。それはここでは全然触れませんでした。今回全く触れる気はなかったのだけでも、観光産業が何で重要かという、地域経済への貢献ということはもちろんあるのですけれども、雇用が生まれるから重要なのです。雇用は何で重要かと言うと、若い人達の就職先に影響してくるのですね。人材の育成とみな口では綺麗事を言うのですが、では育成した人材をどうやって受け入れるのだということもあって、そうすると大学などで観光を担う人材を育成したところで採用してくれないのだから意味ないよと言われることを避けるための手立てが必要です。長野県は観光産業においてもこれだけ雇用が出ているのだよということをやはり出してもらいたいなと個人的には思っています。

あからさまに金融支援というよりは、一般企業が観光産業を理解するというような感じでどうでしょうか。そうすると1つ〇が増えるのか、一般の事業者の中に入れるのか。「観光地域づくりに各々の立場で参画します。」でいいのですかね。観光産業の重要性を理解するとともに、連携して農業と観光、健康と観光をはじめとして新たな観光の魅力の創出に努めますということかと思いますが、違いますかね。

(高野(和)委員)

経営力強化などについてご協力をいただくような内容であればいいのですが。

(佐藤会長)

経営力の強化ということで、一般事業者からの理解と支援を求めるというこのご提案に対して何かご意見はございますか。

皆さんどう思いますか。そこはかなり話題が広くて、おそらく観光産業全体をカバーするということになりますと、もっと前の方ですごく大きな話になっていくような気がします。長野県の観光産業をどのようにつくり上げていくかという方向性にも関わってきて、ひょっとすると長野県観光のめざす姿の柱っぽいものになっていく可能性のある分野だと思います。

だから、イメージとしては、こういう部分にちょろちょろと書いて片付けてしまうには難しいテーマという感じがしますが、どうでしょうか。

(浅井観光企画課長)

今の金融の関係でございますが、具体的な施策の中で商工部と相談をしながら事業の中で考えたいと思います。

(佐藤会長)

約束が取れたようですから、個別に内容の議論をしていただくということでお願いします。

次は資料3、37ページの「計画の検証と評価」。これは、ここにありますように、この審議会として今後も皆さんにお集まりいただきながら計画の推進状況を把握し、それに対して議論してご提案・ご提言などのご協力をいただく、これが検証であろうと思います。その都度事務局の方から進捗状況を提示してもらおうということが今後続いていくかと思っておりますので、モニタリングについてはご理解いただきたいと思っております。よろしゅうございますか。

それでは、これで答申(案)の内容をすべて検討したということになりますが、もう一度、39ページ以降は原点に戻っていただきまして、今まで何のために集まり何を議論いただいたのかということ、もう1度全体を眺めていただいて、言い残した、あるいは、こんなことも言っておきたかったということはありませんか。

(今井委員)

この観光審議会に出席させていただいて色々勉強になりました。

観光も立派な産業なのだということをすごく実感しましたし、やはり「住む人も来る人も、長野県に住んで長野県に来てよかった」と思って欲しいですし、「笑顔のいっぱい長野県」になってくれればいいなと思いました。

(塩島委員)

先月ある県の温泉地にまいりまして、本当に山がなくていくら走っても平らな場所で、やはり長野県の山あり谷あり川ありという強み、長野県に観光に来てくださる皆さんのイメージはまさに「山岳高原」ではないかと思いました。

そこから広がって行って、温泉があり人々の暮らしがある、こうした方向性でい

くべきだと感じました。

(竹村委員)

前回から参加させていただき、色々な意味で勉強させていただきました。

交通事業者という立場でみますと、「信州暮らし」の中で前回も触れさせていただきましたが、県内ルートをしっかりと元気よくしていくためには、我々がやっていかななくてはいけないということが一つあります。

それから、やはり外からの流動に対して前回も触れましたが、我々交通事業者は、これから二次交通であったりそういった部分で色々な連携をやっていかななくてはいけないなということで、皆さんのお力をお借りしながら取り組むことができると感じました。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

それでは最後になりますが、渡邊副会長お願いします。

(渡邊委員)

大変勉強になりまして、今日はとても有意義だと思いながらお聞きしておりました。

全体を通じて感じているのですが、今回、答申（案）の中に「共創」という言葉が入ることによって、いらっしゃる方達に対して県民の皆さんが主体となって対応するということが前面で出ていると感じますが、先ほどの塩島委員のお話のようにその土地を初めて訪れて感じるということのは大切ですので、「外から見た目線」がもう少しこの「共創」の中に取り込まれて、訪れる方達にファンになっていただいて、一緒に地域をつくり上げていただくという発想が出てくればいいのではないかと感じました。

それから、縦割り行政にやや苦慮することが多いのですが、「計画の推進のために」のあたりですが、お客様の目線で仕事をするというのは観光事業者にとって大前提だと感じていますが、常にお客様の目線に触れている事業者と行政がうまく繋がって取り組んでいけるようになることを強く期待したいと思っています。

(佐藤会長)

ありがとうございました。

それでは、ほぼ全体をカバーできたと思っておりますので、審議を閉じさせていただきますと思います。

(浅井観光企画課長)

資料4の答申文はよろしいでしょうか。

県に期待する事項として1から4まで掲げてございますが、これ以外に答申本編で書きつくせなかったことなどがあれば検討させていただきたいと思います。

(佐藤会長)

中身は答申本編を見ればいいのだから、これはこれでいいのではないですか。

それから、今日は事務局の方に宿題が出ています。資料3の22ページ以下、「重点的に取り組むプロジェクト」の表現の問題、それと「信州暮らし」を入れる場所、このような宿題が出ておりました、それを事務局の方をお願いをして、でき次第各委員にメールで回してコミュニケーションをとっていただくことをお願いしたいと思います。

本日は長い時間お付き合いをいただき、ありがとうございます。

以上をもちまして第5回の観光振興審議会を終わらせていただきます。皆さん本当にご苦労さまでした。